2020 年 3 月 27 日発行

リスクフラッシュ 291 号(第 10 巻 第 13 号)

Risk Flash No.291 (最終号･Vol.10 No.13)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

発行責任者：リスク研究センター長　得田雅章

TOPICS

1. 特色ある研究の推進と、研究－教育ループの構築をめざして－経済経営研究所への統合とリスク研究－：田中英明
2. 「継続は力なり」―リスク研究センターの歩みと共に―：酒井泰弘
3. 令和 2 年度　公募型客員研究員任用のお知らせ
4. 「情報誌リスクフラッシュ」休刊のお知らせ

特色ある研究の推進と、研究－教育ループの構築をめざして

－経済経営研究所への統合とリスク研究－

経済学部長　田中　英明

本年 4 月より、滋賀大学経済学部の附置研究施設の再編強化の一環として、附属リスク研究センターは、経済経営研究所と統合します。これにより、十数年にわたって同窓会組織である陵水会を中心に経済・産業界のご支援により活動をしてきました「リスク研究センター」の名は消えることになります。しかしこのことは、人間社会の不確実な未来に向け、人文・社会・自然諸科学の知見の下、科学的根拠と多角的かつ柔軟な視野をベースに課題解決をめざす学際的な試みとしての本学部の「リスク研究」が、いささかも後退することを意味しません。

新しい経済経営研究所は 4 部門体制となります。これまでリスク研究センターと経済経営研究所とでそれぞれに行われていた研究支援業務を統合することで効率化と強化を図る「研究支援部門」に加えて、「リスク研究部門」「先端研究部門」「未来社会研究部門」という部門を置くことで、学部の特色ある研究を組織的に推進していく研究センターとしての性格を明確にします。「リスク研究部門」がリスク研究センターの実績を受け継ぐものであることは言うまでもありませんが、これまで以上に学内外との連携を重視した活動を展開していきます。とりわけ本学のデータサイエンス教育研究センターとの連携・協力を軸に、企業や自治体などと共同して、マーケティング、ファイナンス、財務分析、公共政策等における高度なデータ分析に基づく実証研究を展開します。これはデータサイエンス・ＡＩの発展に応じたリスク研究の進化とも言えるでしょうが、学外の諸機関との積極的な連携により経済・社会の要請に真摯に応えるというリスク研究センターの設置時の理念に立ち返るものでもあります。

「先端研究部門」も、リスク研究センターで展開してきました「研究セミナー」等の活動を継承し、経済・経営を中心に広範な学術領域の最先端の研究者と、本学部・大学院の研究・教育との橋渡しや教育素材の提供を行います。また「未来社会研究部門」は、多様なワークショップ等の活動を受け継ぎつつ、学問パラダイムの内省と変革につながる理論的・実証的研究と、体験的・実践的演習などの教育機会につなげる活動を試みます。「陵水会連携セッション」として学生、教員、卒業生が共通した論題で語り合う場も設けていきたいと考えています。

このように、今回の統合は、滋賀大学経済学部のリスク研究のさらなる向上と飛躍をめざしたものです。また、大学院への導入を計画しています社会人対象の一年制の「ビジネス・データサイエンス専修プログラム（仮称）」などの教育改革にとっても、この統合により研究と教育とのループを強化することが鍵となります。これまで以上に、みなさまのご支援・ご協力を、そして何よりもお声をお寄せいただけますようお願いいたします。

「継続は力なり」

―リスク研究センターの歩みと共に―

国際顧問会議メンバー・名誉教授　　酒井　泰弘

Ⅰ.「リスクと不確実性の時代」に生きる

私がこの世に生を受けたのは、はるか戦前のことである。それから七十余年、今日に至るまで、繁栄と没落、さらに繁栄と没落、まことに予期せざる出来事の連続であったといってもよい。そして今回、リスク研究センターは、その輝かしい歴史をひとまず閉じようとしている。これは恐らく「ひとまず」ということであって、いずれ近いうちに、姿を変えて再生するものと理解している。「継続は力なり」とも言う。将来における不死鳥のごとき力強き復活と再生、そして更に一層の飛躍と発展とを衷心より期待するものである。

自分の半生を振り返ってみれば、私はこの間「リスクと不確実性の時代」を生き抜いてきたように思う。商都大阪の下町において、幼児の私の耳に最初に突入してきたのが、次のごときラジオ放送であった。

「わが帝国陸海軍は、本日未明、西太平洋において米英両国と戦闘状態に入れり」

人々はこの厳粛な言葉を聞いて驚愕し、リスクと不確実性の時代の到来を体感したに違いなかった。それも当初は連戦連勝で、国民の高揚感は上がる一方であった。ところが、昭和 20 年 3 月、わが人生において忘れもしない出来事が発生した。それは米軍 B29 爆撃機による「大阪大空襲」の到来であった。周りの火の海と猛烈な硝煙の中で、井戸水を慌てて入れたヤカンとともに、家族総動員で近くの池を目指して逃げ回ったことは、現時点においても忘れることのできない「一大恐怖体験」であった。

戦後における占領軍の進駐と闇市と買い出しの横行や、かつての「鬼畜米英」のスローガンから「日米同盟」への価値観の大転換とともに、人々の心と身体はボロボロになり、それでも毎日奮闘して、何とかしぶとく生き延びてきた。そして忘れもしない 1960 年代、私の学生時代はいわゆる「安保騒動の時代」であり、毎日毎日、デモとシュプレヒコールの連続の中で非常に慌ただしい生活を送ってきた。大学の図書館すら閉鎖となり、落ち着いた勉強ができない状態だった。そこで私は心機一転、思い切って「かつての敵国」の真ん中に飛び込んで、大学院生活を継続する道を選んだのだった。まさに、「死中に活を求める」と言うような必死の思いであった。

「ミスター・サカイ、そこの元気な君よ、この新しい分野の論文を徹底的に読みこんで、その良い所と問題点とを皆の前で報告してくれないかな？」

ロチェスター大学の帝王たるマッケンジー先生は、前の席にいる私を突然に指名したのだ。

「イエス、サー。ノーチョイスです。サムライ魂でやってみましょう！」

その時、教室全体が爆笑の渦巻の中に巻き込まれたことは、まるで昨日の出来事のように鮮明に記憶しているものだ。その論文とは、巨匠サミュエルソンが切り開いた「顕示選好理論」(revealed preference theory)の分野の最新論文であり、相当に難解な高級論文であった。でも私には、「なにわのド根性」があったので、何とか報告者の役割を早晩に果たすことができた。しかも、当該論文の問題点を見つけ、自分なりに初めて「専門誌への投稿可能論文」にまで仕上げることが出来たのである。「オー、サカイ。グッド・ジョブだよ！」と、マッケンジー先生は私を珍しく褒めて下さった。

Ⅱ．数理経済学から「リスクと不確実性の経済学」へ

私はこうして学位取得後も米国に残り、「鉄と煙の都」なるピッツバーグ大学にて、「数理経済学」の担当教師となった。でも、私の心は十分満たされず、何か「鉛のように重々しいもの」が残っていた。私の求めていた経済学とは、このような「公理・定理・証明」の連続のような「素っ気ないもの」だったのだろうか？

こういう疑問が徐々に形成されてきた矢先に、ゲーム理論の大家・モルゲンシュテルン先生から親切な助言を頂戴したのである。

「ミスター・サカイ。君はまだ若い。リスクと不確実性の経済学という名の新しい学問が、現在興隆していますよ。君はひとつ挑戦してみてはどうですかね？」

これは当時の私にとっては、「天上の垂訓」に等しいものだった。調べてみると、その分野のフロントランナーは、アカロフやスペンスやスティグリッツなど、私と同年配の青年たちである。「よし、これなら思い切って舵が切れるぞ！」と、私は瞬時に決意したものだた。

Ⅲ．筑波大学から滋賀大学へ、そして「リスク研究センター」へ

そうこうしている内に、自分の両親が歳を随分とってきているのを感じてきた。そこで私は、久方ぶりに日本へ帰国することを決断し、まず西の広島大学へ、さらには東の筑波大学へと居住地を大きく転換することにした。

私は筑波大学から、人生の楽しさと苦しみを同時に教えて頂いた。それは激しい大学紛争の結果として生まれた「新構想大学」ではあったものの、そこに住む人間は相変わらずの「旧式人間」であったので、かかる新旧両面の軋みに相当苦しむこととなった。とまれ、研究面に限っていえば、私のリスク研究は更に進展して、本邦最初の『不確実性の経済学』（1982 年）などの研究書などを出版することが出来た。その時に就任した「日本リスク研究学会」の会長職が、今の滋賀大学就職への橋渡しの役割を果たすことになった。というのは、日本学術会議主催の研究報告会の司会役を務めた私は、滋賀大学教授の方（福田敏浩氏）と初めて接触することになったからである。それが縁となり、私は当時の宮本憲一学長・成瀬龍夫副学長・北村裕明学部長などの方々と親しく会談することになり、三十年ぶりに「関西復帰」を図らずも果たすことに相成った。人生はまさしく「塞翁が馬」であり、本当に何が起こるか、まったく予想がつかないものだ。

そうこうするうちに、滋賀大学において、日本最初のリスク研究科（博士課程）開設の話が浮上し、私自身がそれに大きく巻き込まれる運命になった。それと同時に、わが「リスク研究センター」の開設の動きが出てきたのは、まさに自然の成り行きという以外に形容の方法がなかろう。私は辛うじてセンター長の職務を免れたものの、本センターの活動や運営には深く関わることになった。私の記憶に間違いなければ、大連の東北経済大学へ二度ばかり洋行し、大勢の中国人学生に対して、リスク研究の意義と役割に関する講義を行った覚えがある。さらには、有馬敏則教授の発案により、朝日新聞社との共催の形で「近江商人に学ぶ」という名の大講演会（2009 年）を、大津の琵琶湖ホールにて開催した経験が頭の中に残っている。

Ⅳ.「リスクはクスリ、クスリはリスク」―リスク研究の道はなお長く続く―

逆さ言葉で洒落てみると、「リスクはクスリ、クスリはリスク」なのである。英国の文豪シェイクスピアも宣っているではないか。曰く、「良いは悪い、悪いは良い」（Fair is Foul. Foul is Fair.）　あたかもコインの表と裏のように、リスクを含めて全ての物事には「良い面と悪い面」の両面が存在する。

伝統ある経済学の「大道」の立場から見ると、リスク学ないしリスク研究は、ある意味で「脇道」の学問かもしれない。私自身、米国の大学で学位を得た頃は、「学問の正道」を歩む者という自負心、ないし若干高ぶった気持があったことは否定できないだろう。だが、ベルリンの壁の崩壊（1989 年）とリーマン危機（2008 年）を経てからは、経済学自体に対する私自身の気持ちが大きく変化したのだ。正直言って今や、経済学の「高塔」自体が、その土台から揺るぎ出している。「リスクや不確実性の問題」など、従来軽く考えられてきたものが、今や「喫緊の大問題」となっているのだ。学問の「大道」か「脇道」かの境界線自体が曖昧模糊となってしまっている。現時点では、リスクや不確実性をむしろ積極的に取り組む「新しい綜合的経済科学」の誕生が切に待たれている情勢である。

わがリスク研究センターの歩みを振り返って見れば、ディスカッション・ペーパーの ABJ シリーズの刊行は特筆すべきものだろうと思う。私自身も、同ペーパーを何度も執筆させて頂き、やがては和文・英文の書籍として結実させたことは、今では「楽しい思い出」である。だがしかしである。たとえセンターが一時的に幕を閉じるにせよ、リスク研究自体は永遠に継続するのだ。近い将来、それが何らかの形で復活するだろうことを願っている。「楽しい過去の思い出」だけでなく、「楽しく新しい船出」が欲しいものだ。わが滋賀大学が、日本および世界におけるリスク研究の中核的位置を維持し続けることを信じてやまない。そのために、私自身も出来るだけの協力を惜しまない決意なのである。（終わり）

令和２年度
公募型客員研究員任用のお知らせ

リスク研究センターでは、平成 29 年度より【公募型】客員研究員制度をスタートさせました。

【公募型】とは、博士後期課程修了者、並びに本学以外の博士後期課程在学生を対象に公募しており、採択された場合、1 年間の任期で活動いただいております（再任可）。

本制度により平成 29 年度は 11 名、平成 30 年度は 9 名、令和元年度は 9 名の客員研究員を任命し、全員が積極的に滋賀大学における研究交流に参加して頂いています。

令和 2 年度への公募には 10 名の応募が有り、今回センター運営委員で応募書類の選考を行い、8 名を任用する形になりました。

8 名には 4 月より、経済経営研究所客員研究員として研究活動を行って頂きます。

この制度をきっかけとして、貴大学の若手研究者と滋賀大研究者の交流が更に進めばと期待しております。

令和２年度　経済経営研究所客員研究員一覧

任期：令和２年４月１日~令和３年３月 31 日（再任可）

1. 田島　正士　氏（滋賀大学、京都外国語大学、帝塚山大学・非常勤講師）

研究テーマ：不確実性に対する消費者意識としての対応

2. 李　珊　氏　（南山大学社会科学研究科経済学専攻博士課程）

研究テーマ：金融市場における混合寡占理論分析の展開

3. 石川　清英　氏（大阪信用金庫・執行役員）

研究テーマ：地域金融機関の経営悪化要因分析

4. 脇屋　勝　氏（日本取引所グループ総合企画部主任研究員　兼　東京証券取引所 情報サービス部（指数運用企画））

研究テーマ：株式市場における浮動株と実需に基づく流動性との関係

5. 鐘　鑫　氏（大阪大学経済学研究科博士課程在学中）

研究テーマ：調査・研究のテーマ 流動性リスクと株式リターン: 尺度の多様性の再検証

6. 徐　磊　氏（神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程在学中）

研究テーマ：アジア通貨と米ドルおよび中国人民元の相互依存関係の変化

7. 京井　尋佑　氏（京都大学大学院農学研究科博士後期課程在学中）

研究テーマ：気候変動リスクに対する個人的意思決定・集団的意思決定の社会的相互作用：社会的相互作用の環境配慮行動をいかに促進するか？

8. 畠中 賢治　氏（大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程在学中）

研究テーマ：株式市場のマイクロストラクチャーと市場が持つ価格発見機能について

「情報誌リスクフラッシュ」休刊のお知らせ

平素は格別のお引き立てを賜り、厚くお礼申し上げます。
平成 22 年 12 月の第 1 号の創刊以来、皆様に並々ならぬご支援を頂戴してまいりました「情報誌リスクフラッシュ」ですが、新年度より新体制発足に伴い、本センターでは『経済経営研究所』との組織統合に伴い組織名称が変更されます事から、本日令和 2 年 3 月 27 日発行の 2020 年 3 月号（通巻 291 号）をもって一旦休刊することとなりました。

休刊後の情報発信としての形態は目下検討しているところでございますが、形を変えて今後も研究、イベント、書籍等の発行のお知らせ等の多彩な情報をご提供していく所存です。まだ不確定なことが多く、具体的なことが決まりましたら改めてお伝えさせていただきたく存じます。

創刊から 9 年 3 か月「情報誌リスクフラッシュ」を長きにわたりご愛読、ご支援下さいました読者・執筆者・関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

なお、新年度からは経済経営研究所として旧来の御愛顧にお応えできますよう、さらに努力して参る所存でございます。
何卒一層の御支援御指導のほどお願い申し上げます。

略儀ながら書中・メールをもちまして、御礼かたがた御挨拶とさせていただきます。

令和 2 年 3 月好日　　滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局、運営委員一同

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】
1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】
1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】
1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】
1. 配信メールが回線上の問題（メールの遅延，消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】
1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変して blog 等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。
（ https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/10/2/3/12.html）

発行：滋賀大学経済学部　附属リスク研究センター
編集委員：得田雅章、近藤豊将、石井利江子、野田昭宏、菊池健太郎、松下京平、井澤龍、清水昌平
事務補佐員：山﨑真理

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:月－金　10:00-17:00）
〒522-8522　滋賀県彦根市馬場 1-1-1　TEL:0749-27-1404　FAX:0749-27-1189
e-mail:　risk@biwako.shiga-u.ac.jp
Webpage : https://www.econ.shiga-u.ac.jp/risk/
Facebook：https://www.facebook.com/shigariskcenter/
Twitter：https://twitter.com/shigarisk